

齊藤正二さんへの弔辞

齊藤正二さんは本当に魅力的な人である。一度会えば誰もが引きつけられる、不思議な人である。その齊藤さんが亡くなってしまった。食道ガンと肺ガンで10年あまりの闘病の末、2018.12.31、大晦日の朝起きてこられなかったそうである。前日、農場の全従業員を集め、自分は農場のすべてを奥様に託すので、これからは奥様のもとで協力してやって欲しいという趣旨のお話をされ、あたかもご自分の死を見通していたかのようであったという。回復の困難な大病と向き合い、いずれは訪れるこの日に向けて、ご家族、農場経営、家族同様の従業員との関わりなど、様々な問題を整理しながら、人生への未練と果てないご自身の夢に対する心の葛藤を整理しながらこの日を迎えられたのだらうと思う。どれをとっても見事としか言いようのない人生の閉じ方であった。

私自身は、千葉大に入学し、教養のサークルである植物同好会に入ってもなく、現役先輩たちから幾度となく「齊藤らっぱ」あるいは単に「らっぱさん」、という愛称を持つ齊藤さんについて、その逸話の数々を聞かされており、畏敬の念を抱く遠い存在の先輩であった。その方にはじめてお会いできたのは、私が園芸学部の教員として松戸に戻って、だいぶ経ってからであった。気さくなお人柄に接し、とたんに身近な存在となったときの喜びを今でもよく覚えている。齊藤さんはその当時、千葉県の子子町で球根類の生産をされていたので、学生を連れて見学にお邪魔したことがあるが、その後、なかなかお会いする機会がなく、時は過ぎた。再会できたのは2001年12月のバンコクであった。花を扱う現地の日本企業の方達との夕食の席だったように記憶している。

2005年には、チェンマイ近郊で開設された農場にはじめてお邪魔し、その居心地の良さに、心を解放されるような感動を覚えた。以後タイには年に1、2度出張があったので、そのたびに口実を作ってチェンマイまで足を伸ばし、農場に2～3泊させていただいた。広大な農場で栽培されている植物を見ながら、のんびりと過ごし、母屋の入り口の屋外にあるテーブルで食事をごちそうになりながら、植物だけでなく人生、社会問題など幅広い分野にわたって齊藤さんご自身の考えを聞かせていただいた。ここで、私と同じような時間を過ごされた方は、日本人だけでなく、本当にたくさんおられたのではないかと思います。齊藤さんはほんなにご自身が病気で辛く苦しくても人々を暖かく迎え入れ、居心地の良い空間の中で我々を元気づけ、叱咤激励し、そしてまたもとの世界に送り返して下さいました。



その存在の大きさに今更ながら驚き、また感謝の念に堪えない。

当たり前のことであるが、人が亡くなれば、その人の頭の中にあつたこともすべて消えてしまう。ほら吹きラッパと思われるようなことを次々と実行していかれた方である。お元気であればまだまだたくさんのラッパを聞かせていただけたのに、と思う。齊藤さんの頭の中にはいったいどれほどのことが詰まっていたのだらうかと思うと、誠に惜しいという他ない。

私が撮った数少ない写真の1枚を添付させていただく。もうすでにご病気がある程度進んでいたときではあったが、農場内を自ら杖をつきながら案内して下さった。その杖は、農場の外れに植えてある、中が空洞になっていない茎を持つ種のものであり、普通の杖よりもはるかに丈夫だとおっしゃっていた。この竹のようにぎっしりと芯がつまり、まさに大地にどっしりと根を下ろし、ご自分の信じる道をただひたすら歩んでこられた方の姿がここにあるようだ。独立独歩という言葉がこれほど似合う方はいないのではないかと。この写真のような人なつっこい笑顔で、「おーい三位君よ、やってるかい」と言う声が今でも聞こえそうな気がしている。

齊藤さんのご遺骨はご自身の遺言通り、2018年4月にチェンマイ市内を流れる川に沢山の花と共に散骨された。私もご家族、従業員、友人の方々と共にお見送りさせていただいた。またご遺骨の一部は分骨され、故郷の子子町に眠っている。日本とタイという二つの国にまたがった2度の人生を、ご自身はどのように振り返っておられるのだらうか。心よりご冥福をお祈りする。

(千葉大学名誉教授 三位正洋)